

○和名に用いられる‘大葉’の読み方について (津山 尚) Takasi TUYAMA :  
‘Taiyoo’ and ‘Ooba’ as a prefix of Japanese plant name

植物の和名にしばしば出てくる‘大葉’は小葉(コバ)に対してオオバと読まれるのが今では普通のように思われているが、古くはタイヨウ(タイエフ)であった。古く園芸家がある種類の中で、‘大葉のもの’、‘小葉のもの’と区別していたのが始まりで(地錦抄, 1710 年など)、これが表だって植物和名に取り入れられたのは後のことである。水谷豊文: 物品識名及び拾遺, 1809, 1825 にはタイヤウノセンキュウ, タイヤウノカワラサイコと‘の’の字入りになっている。小笠原島産の *Piper postersianum* Maxim. は今ではしばしばオオバナフウトウカズラと呼ばれるが、この標本を Maximowicz 氏に送付された矢田部良吉先生は古い伝統に従って、タイヨウフウトウカズラと呼んでいられたことが明かである。M 氏の論文, Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Pétersb. 31 : 93 (1866) に先生の標本を引用して, Sub. nom. jap. Taiyō futokadsura と書いているのがその証拠である。安倍為任の新撰物名識名, 28 丁のタイヤウセンキュウ (1877, 明治 10 年), 早田先生のタイエウシダ (*Dryopteris erubescens*), 牧野先生のタイエウベゴニア (*Begonia rex*) など少い例の中である。園芸書などにダイヨウベゴニアなどあるのは少くとも伝統的の読み方ではないようである。中井先生は明かにオホバフウトウカズラと記しておられる。大葉をタイヨウと読む伝統は明治の初期頃には弱まってしまい、今はご存知のとおりオオバ何々が大半はやりである。岡安定の品物名彙 (1859 年) もタイヨウで通している。しかし、岩崎濯園の本草図譜 (1828 年) は終始オホバ何々としている。これは寧ろ当時の新発明であったのかも知れない。また、飯沼慾斎の草本図説 (1832 年) にもオホバセンキウが見える。こういう言葉は普通の辞書には出ない言葉なので、この記述は厳密なものではないが、変遷の大体の歴史は調べにくいのであるが、言葉に対する時代の嗜好の変化が見られて面白い。これと似て非なる例に、シマ何何という語がある。昔はシマはもっぱら動物名に関して縞の意味に用いられていたのであるが(シマスゲ, シマススキ, シマウオなど)、学者の研究が遠心的に外地に伸びて行くのにつれて、琉球、台湾、或は小笠原島などの‘島’を意味する方に用いられることが多くなった。〔註〕片仮名の綴りはすべて原著者によった。(お茶の水女子大学)

□R. A. Howard, B. L. Wagenknecht & P. S. Green: **International directory of botanical gardens**, 120 pp., Aug. 1963, Internal. Bureau Pl. Taxon. Nom., Utrecht 世界の植物園の名録で、各国別に分類され、次に都市の ABC の順に並べられている。所属、面積、位置、高さ、植物数とその特徴、温室室の有無、園長ほか主要人員名とその専門別などが列記されているので大変便利である。ソ連とアメリカが数が多く、イギリス、ドイツなどがそれに次いでいる。日本は金沢大学、春日部、神戸市立、京都武田、大阪市立大学、札幌北海道大学、仙台東北大学、東京大学小石川などの植物園が記されている。(大井次三郎)